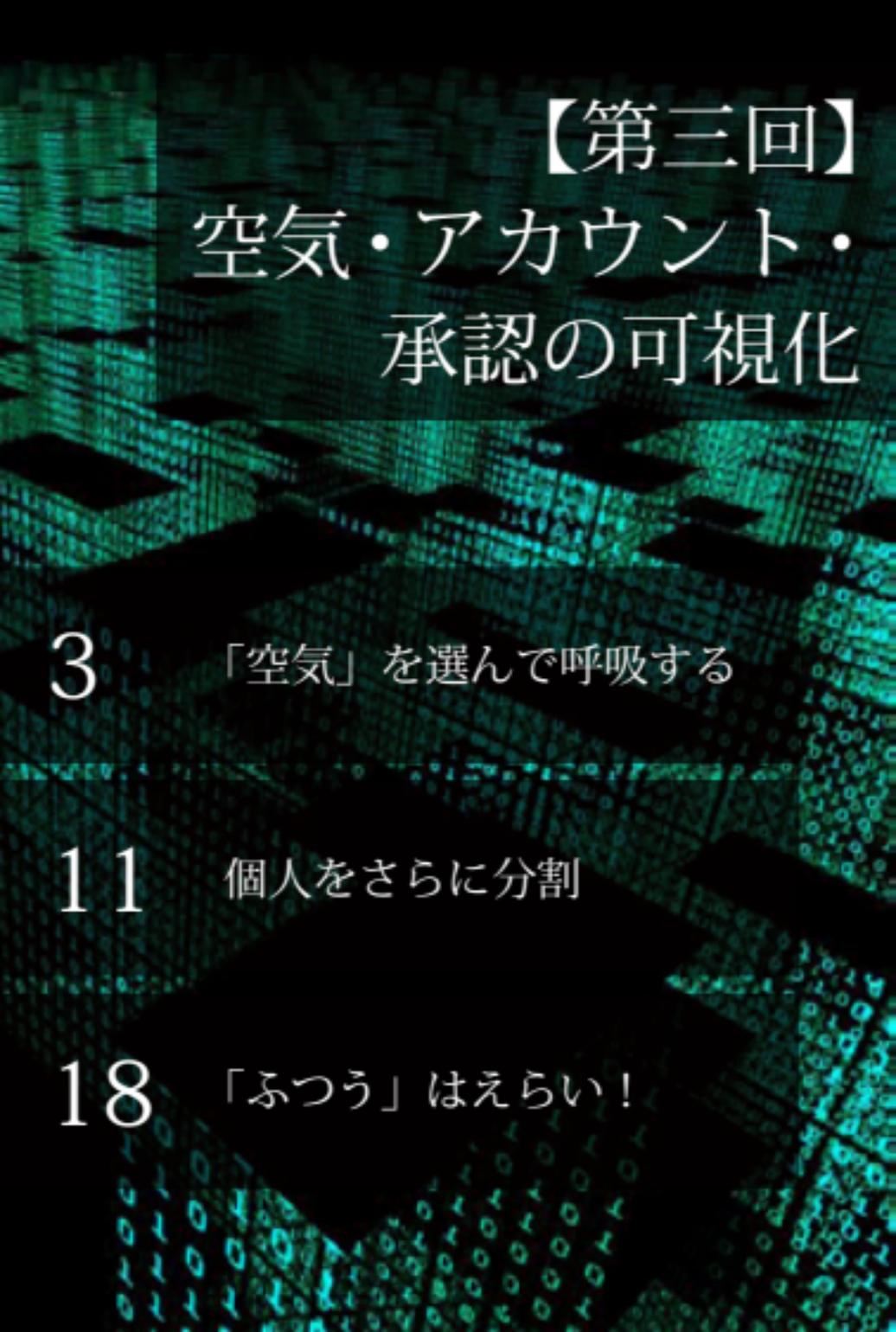


革命エデュケーション 第一部

iPhoneの 先にある未来

【第三回】

空気・アカウント・承認の可視化



【第三回】
空気・アカウント・
承認の可視化

3 「空気」を選んで呼吸する

11 個人をさらに分割

18 「ふつう」はえらい！

■ 「空気」を選んで呼吸する

鶴川 「家族や恋人すら他者」という流れから言えば、自己の内にも異質な他者は住まっているわけですよ。それを「イイネ！」は殺してしまう。外部化された単一の自己によって、本来あるはずの内面の「わけのわからなさ」は削り取られていく。日記も、期待された自己像をなぞる形でしか書けない。せめて、そこに対する抵抗や書き上げたものと自分自身との齟齬そごが自覚されればいいんですけど、どうもそういう風には見えない。むしろ、期待される自己像を反復することによって、自己肯定感を強めているような。アイデンティティ・クライシス¹

1 異質な文化との接触によって、自我のあり方に揺らぎが生じること。青年期に他者や社会と接触することによって、多くの人を経験するものでもある。

どころか、アイデンティティ・カタルシス²みたいな状況ですね。コミュでのやりとりも、良き理解者のような顔で当たり障りのないことを書き連ねる。外部がないということでは、前に書いたように子供っぽい社会なんですけど、内部でのやりとりは気遣いをベースにした「大人」の対応になっている。(でも、今は子供の社会も「空気」に支配されているのかも)

細井 mixi や FB でのコミュニケーションで、摩擦やノイズをいかに低減していくかが第一義って感じがするんですよ。前に出たソーシャルゲームの話じゃないけど、内実は別としてつながっていることが優先される。そこでは「空気」

2 鶴川の造語。カタルシスが精神的な浄化状態を指すことから、自己を物語化することによって快感を得る態度を表現した。精神分析におけるカタルシスとは関係ない。

が強大な支配力を発揮する。なんか、外
の人間からするとすごく不思議な光景で
す。宗教とか政治とかではなく、目に見
えない空気に人々が救いを求めている状
況。ある意味ではこれが究極の大衆社会
の姿なのかな、という気がします。「大衆」
という顔の見えない存在を、皆が追いか
けてしまっているような(そう考えると、
上野千鶴子³は20年前にイイこと書いて
ましたね)。

だから現在のSNSのあり方を見てい
ても、正直「新しい民主主義の可能性を
開く」可能性があるのはやはり一部なん
だろうなあ、と。僕がSNSの公共性み
たいなところに可能性を感じるのは、昔
ならつながらなかつた人とつながれると

3 社会学者。『増補〈私〉探しゲーム—欲望私民社会論』
(ちくま学芸文庫、1992年)を参照。

いう点でしょうか。ただの学生や社会人でも、数人の人を介して政治家や著名人と関係できる（もちろん、それも一部ですが）。そのあたりには既存のそれとは違うソーシャリティの可能性を感じるところです。あと、Twitter が台頭してきた頃に思ったことなんですが、この手の SNS サービスは、目まぐるしい速さで新しいプラットフォームへと移行していく。今は FB や Twitter の話を中心にしていますが、これが 5 年前だったら mixi やブログだったと思います。このあたりのテクノロジーとコミュニケーションの関係性は、先が読めない部分がありますよね。

鵜川 ふと思ったことなんですが、いま僕たちはなんとなく「空気」という言葉を使ったんだと思うんですけど、リア

ルな関係性の中で読まれる「空気」と、SNS上のコミュニケーションにおける「空気」って、同じなんですかね。リアルな関係性の場合、「空気」って言いながらも、けっこう具体的な場に依存していると思うんですよ。逆から言えば、その「空気」を醸し出すのが「場」ということになりますか。でも、SNSの場合、そこに既に「空気」が存在しているんじゃないかな、と。あるいは、コミュニケーションとして許されている身振りが、既に一定の制限を受けている、というか。そういう意味では、「読む」というプロセスが入り込めないのがSNSの「空気」なのかな、と。もちろん、話の流れとか、キャラや役割関係というのはあると思いますが、振舞いの自由度はずっと低い気がします。違う言い方をすると、そこそ

こ社会性が高くないと、SNS での人間関係ってままならないのでは、って感じですよ。

とはいえ、一方でより自由度の高いコミュニケーションが展開されてもいるわけじゃないですか。その両者の違いって、アーキテクチャ⁴によってもたらされたものというより、もともと個人が持っている資質や傾向が強化・増幅されて現れてるんじゃないか、と。SNS に求めるものが違っているのはもちろん、そこである行動が繰り返し強化されるような、あるいはその行動がリアルなコミュニケーションよりも容易であるような場があれ

4 もともとは「建築」や「構造」を指す言葉であるが、アメリカの法学者ローレンス・レッシングは、法・(社会)規範・市場と並んで我々の行動を規制するものとしてアーキテクチャを定義した。アーキテクチャは、建築的な構造や、ネットにおけるプログラムの特性によって、我々の行動を事前に制約している。

ば、そこでの人の振舞いってというのは、おのずからいくつかのパターンに収斂^{しゅうれん}していくのかもしれない。リアルでは誰もが「空気」を読まなきゃいけないけど、それが苦手なら、ウェブ上では、そのような振舞いの不要な場を選べばいい。Twitterが面白いのは、そういう点かな、という気がする。一方、mixiは「空気」を重視する。だから、僕自身、ツイートをmixiのボイス⁵に反映させたりは、絶対できない。

細井 現実の場とSNSの違ってことですね。鶴川さんが言いたいのは、「FBとかmixi的な（比較的）顔の見える繋がり方の場と、そういう要素の薄いTW的な場では、もともとの性質が違って、ユーザーもそこいらを意識して使っ

5 mixiに搭載されたTwitterと類似したサービスの名称。

ているのでは？」てことなんですかね？
一応、僕個人としては鶴川さん同様、そのあたりは気にしているつもりですが、そのあたりはユーザーの立場と意識の問題によってかなり変わってくる部分だと思います。具体的な例を出すと、タレントや政治家といった人たちは、「自分」であることを前提にしてSNSをやっている。

それに対して多くの一般（ちょっと適切でないかも）ユーザーは、「仮構としての自分」というか、自己の一部を拡大したり、一種のオルターエゴ⁶としての自分をSNSの中で「振舞っている」と思うんですね。もちろん、タレントとかも自分のキャラを演じてるわけだけど、

6 別人格のこと。意図的に演じられているものを指すことが多い。

その度合いがだいぶ異なるというかで、それと同様に、mixi と TW の自己がほぼイコールの人もいれば、かなり使い分けてる人もいるのかなと。ただ、確実に言えることは、アイデンティティというのが昔は一貫した統一的なイメージで捉えられていたのに対して、今は仮にそーゆーものがあっても、必要な場に応じてそれらを切り出していく、みたいなイメージになってるんじゃないかなー、とは思います。その意味で旧来のアイデンティティ観はもはや過去のものになっているなというのが、僕自身の印象ですね。

■ 個人をさらに分割

鵜川 アイデンティティのことについては以前考えたことがあって、それこそ、

近代社会というのは、個人を単位として成立したわけですが、その個人、英語で言えば individual は、文字通り分割不能なものとして構想されたはずだった。ところが、個人をさらに細分化する可能性として、アカウント⁷というものを考えることができるんじゃないかと思うんですよ。

細井 なるほど。それは個人の中にあるいろいろな要素を分割して、意識的に使い分けるということですね。今後はそういった自我のあり方が当たり前になると？

鶴川 どの程度意識的かは個人差があると思うのですが、その辺りが象徴的に現

7 コンピューターやネットワークの利用者が、その内部にログインする際に必要となる（割り当てられる）アクセスの権利のこと。個人認証のために使われるものであり、ここではID とほぼ同義の言葉として用いている。

れているのがハンドルネームです。一つには、HNの付け方に、そのアカウントを騙る自分を（あるいは、そのアカウントで語る自分を）どういう存在として意味付けているかが見えるということ。苗字か名前か、ひらがなかローマ字か、あるいはあだ名の場合は、リアルな自我から遠い所に設定している感じがある。そのHNでオフのコミュニケーション⁸を行っている場合に、それを強く感じます。相手の本名を知るまでは、オンで行っているような話題しか持ち出せない。

もう一つは、匿名性の問題。一昔前は、本名でコミュニケーションしないネットの世界は、個人にその発言に対する責任意識が弱いから、やっぱり本名で語らな

8 ネット上で知り合った同士が、ネットを介さずにコミュニケーションする状態。それに対して、ネット上でのやり取りをオンと呼ぶ。off-line、on-line に由来する言葉。

いとダメだ、みたいな風潮があったのが、最近では、HNであっても、十分に同一性の根拠になるから、大した違いがないと考えられつつある。

実際、責任回避を企図しなければ、SNSでも掲示板でも、同じHNを使うのが普通だし、本名不在のまま有名になっていくネット論客みたいな人はたくさんいる。そこまでじゃなくても、本名じゃなくてHNで自分を認識してもらいたいという人は、意外と少なくないはずです。

そして、考えを進める上でわかりやすいのが、アカウントを消去する時と、別アカウントを取得する時。これが、アカウントをベースとした「個人」の新しい部分だと思います。今使っているアカウントとしての振る舞いが嫌なら消してしまえるし、そのキャラでつぶやけないこ

とをつぶやくために、別の自分を創出してしまってもできる。

そうすると、さっき細井さんの言ったタレントや政治家を同じレベルで考えるのは、難しいのかな。認知され過ぎたアカウントと考えられなくもないけど、根本的に、それを消去することはできないから。それこそ、近代的な個人とは文字通り別次元に成立するのがアカウントであり、その名札となるHNは着脱可能性含めて、この手のコミュニティの性質を象徴的に背負っている気がします。

細井 そうですね。ネットはよく「顔が見えない」という言い方をされるけれど、顔に象徴されるようにある部分を捨象、もしくはカッコに入れたコミュニケーションというのは、やはり大きな特徴ですよ。さっき書きましたけど、ある種の

「仮構としての自己」をアイデンティティとしていくというか。

まあ、ある意味では現実社会における僕たちの行動も、実際はある一部分を切り出したりしている（例：職場においての人間関係は、あくまで仕事だけのもので、プライベートでは付き合わない）だけではあるんですが、そのあたりがもっと可視化されているのがネットなんでしょうね。あと、面白いなと思ったのが、アカウントは消去可能という部分ですね。例えば陳腐ですが、ゲームみたいにリセット可能であると。一回構築したものを捨てて、もう一回ゼロから立ち上げられる、という感覚はネットでは非常に強いですね。そこでふと思ったのが、SNSのコミュニケーションが、この10年弱で mixi → myspace → ツイッタ

ー or FB みたいにどんどん移り変わって
いって、人にもよるのかもしれないけど
関係する人自体だったり、あるいはコミ
ュニケーションの質がどんどん変化して
る感じがするんですね。これはテクノロ
ジー決定論⁹的な話とも関係するんです
が、見方によってはプラットフォームに
よって我々は形作られていると言えるの
かな、と。少なくともそこへの意識は必
要な気がします。あともう一つの話題を
すると、レスポンシビリティの話ですよ
ね。匿名的な自己が責任をどこまで負え
るのか、追うべきなのか、ということだ
すね。

9 テクノロジーが社会や文化の在り様を決定するという
考え方。

■ 「ふつう」はえらい！

鵜川 確かにどちらも重要な問題ですね。まあ、テクノロジー決定論やプラットフォームの話をしていけば、いずれレスポンスビリティの問題にたどり着くと思うので、前者のことから考えていこうと思います。で、SNSの話をする前に確認しておきたいのが、ネットにおける人間関係で、最も異様なのが承認関係だということ。日常生活だと、あたりまえのことをあたりまえにしているけど、それに対する他者承認は、目に見える形では行われないう。期限を守るとか挨拶するとかしても、そのたびに評価されたりはしない。もちろん、それが別の形（重要な仕事が回ってくるとか）で評価として還元されることはありますが、行為そのもの

と価値づけとしては、あたりまえのことにすぎないわけです。ところが、例えばオークションサイトなどでは、見えない取引相手が「あたりまえ」のことができる人かどうかということが重要になる。だから、「非常に良い」出品者・落札者であることが、情報として価値を持つ。もちろん対面でも、相手が「ふつう」の人であることは重要ですが、「ふつう」の人だったからっていちいち評価を触れ回らないし、もちろんその人の評価を事前に知ることなどできない。だから、ネットではリアルよりも他者承認が重要な価値を持つ、ということは言えると思います。

ただ、残念ながら、承認されることは気持ちいい（笑）。だから、例えばYahoo 知恵袋みたいな質問サイトでも、

いい答えをしてベストアンサーとして承認されることを生きがいにする人が出てくる。Amazonでも、ベストレビュアーになることを重要視する人が出てくる。別にそれを批判しているわけではなくて、これは重要な変化だということです。たとえば、ブログが隆盛を誇っていた（笑）時代には、こうはならなかった。今でこそブログにも拍手ボタンがついていたりしますが、かつては、ブログに対する反応はコメントしかなかった。もちろんたくさんコメントが付くブログもありましたが、ほとんどのブログは（記事の内容が良くても）コメントはほとんどつかない。せいぜい、アクセスカウンターでアクセス数を知ることができるぐらい。だから、特にSNSベースのコミュニティの変質を考えるときに、まず評

価値が可視化されるようになり、その後、相互承認を核にするようなコミュニティが生まれていく、という流れは念頭に置いておくべきか、と思います。

細井 そうですね。ここでの「承認」でのポイントとしては、やはり可視化されている、というところかなと。友達やフォロワー、コメントや評価まで、とにかく数字の世界。それが多ければ多いほどいい、みたいな価値観にはすごく違和感を覚えます。僕は「♪友達百人できるかな」という歌が子供の頃から好きになれないんですけど、それが現実のものになっていることにちょっと背中寒い気持ちがあります（笑）。そこでは量的なものが前景化して、質的なものは後ろに行かざるを得ない。だから「食べロ

10
グ」の問題¹⁰とかも起きるんだらうけど。その意味で、データベース化というのは一時期からの社会学のキーワードだと思うんですが、そこに相互監視システムのアーキテクチャというのを加えれば、今のネットにおける人間関係はだいたい押さえられるのかな？ て気もします。

だからちょっと補足的に書くと、そういった SNS のシステムを作ってる人たちにどこまでの意識なり自覚なりがあるのか？ てことが気になるんです。自覚的に相互承認のシステムを（肯定はしていないにせよ）利用できると考えてやってるならともかく、「FB にある機能を搭載しよう」みたいな感じで「イイネ！」機能を mixi が載せてるんだとし

10 レストランの口コミ情報サイトである「食べログ」において、宣伝のために「やらせ」の書き込みが行われていた問題。

たら、ちょっとなあ…という気がしますね。mixiは僕の周囲では最近すごく評判が悪いんですけど（笑）、本当に「改悪」という方向に向かっている感じですね。久々にログインするたび、よくわからない機能が追加されてる（笑）。それがさっき言った偽善的な相互承認システム（今名付けました）を強化するようなものばかり、というのが評判が悪い理由なんだと思います。それと比較すると、Twitterも相互承認的要素は当然入っているんだけど、ちょっと方向性が違うのかな？　と思うところがありますね。

（以下次号）

《革命エデュケーション》

iPhone の先にある未来

【第三回】 空気・アカウント・承認の可視化

平成24年6月4日 発行

著者 細井正之・鶴川龍史

編集者 鶴川龍史・細井正之

発行所 世田谷学園 国語科